

平成 27 年度第二回特定鳥獣保護管理検討委員会及び屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキング合同会議 議事概要（案）

1 ヤクシカの生息状況について

- ・推定個体数は、平成 25 年度は 17,307～27,523 頭、平成 27 年度は 21,206～31,330 頭となり、平成 25 年度と比べると増えている。
- ・標高が低い所では減っていると考えてよいが、高い所で減っているかの判断は時期尚早である。
- ・平成 27 年度のシカ推定密度はほとんどの所で 20 頭/km²を超えている。全国的な水準では km²あたり数頭というところまで下げるべきである。
- ・一湊林道では鹿児島県の推定で 12.6 頭/ km²と減ってきており、捕獲の効果ではないかと考えている。

2 ヤクシカによる被害状況

- ・被害面積については昨年と比較ほぼ横ばいではしているが、依然として作物全般に被害している状況である。住民の生活圏内での果樹、家庭菜園における被害も発生している。
- ・植生保護柵を作って外と中で差があるかは一つの判断材料になる。
- ・ヒズクシや一湊林道では激甚な植生被害が確認された。

3 ヤクシカの捕獲状況

- ・平成 26 年度の捕獲実績は 5,285 頭。平成 27 年度は 1 月末計で 4,430 頭であった。
- ・平成 25 年度以降の捕獲効率の低下は、該当林道における生息数の減少によるものか、くくりわなに慣れたスレジカが増加したのか、検討する必要がある。
- ・10～11 月とかなり顕著に捕れているが、繁殖行動との兼ね合いや褒章金の対象期間などで、捕獲効率が高くなる場所があるのかもしれないので、捕獲適期を見極めるためにも月別の捕獲効率を詳細にみていくことが必要である。

4 ヤクシカの移動状況調査

- ・GPS 首輪による移動状況調査結果をベイズ統計手法によって分析した。メスは低標高で活動し、林道依存型であった。
- ・矢筈岬はかなり高密度化しているが、スギが生えているところまで上がって、また帰ってきているということが胃の内容物から考えられる。

- ・林道沿いのシイ・カシの二次林と、スギ・ヒノキの植林地を好んでいる。スギ林を利用しているのは間伐後に多い。

5 計画捕獲の検討

- ・シカの密度に照らし合わせた場所ごとの捕獲手法の検討が望まれる。西部のような高密度地域はまず囲いわなで生息密度を下げるべきである。捕獲自体の合意形成と、捕獲個体の処理をどのようにしていくのかの検討が必要である。一方、生息密度が比較的低い山岳地域ではSSによる捕獲を進めていくことを検討している。個体数管理は猟友会の協力なしにはあり得ないが、専門家の活用や人材の育成等も急務の課題である。

6 生態系管理目標

- ・西部ではシカによる林床植生の消失から土砂が流出し、地表性甲虫（オサムシ、ゴミムシ）などの生息数が大幅に減少している事例がある。
- ・様々な指標の基に管理計画を策定するのはよいことだが、それぞれの目標を達成するための手段をどこでいつ議論を始めるかということが重要である。
- ・暫定的に 20 頭/km²という個体密度でやっていたが、個体密度を達成したいために個体数調整をやっているのではなく、ここで議論している生態系管理の目標を達成するための中間的な指標として個体密度を使っており、その個体密度は適宜見直していく必要がある。大目標として、植生を含めた生態系を維持したい、というのが目的となる。